東京新聞

ミラー

医師ら集まる常磐病院

大学生　妹尾　優希　23
（東京都練馬区）

私はスロバキアで医学を学んでいる。東日本大震災のときも海外にいた。スロバキアでは、今でも福島は放射能汚染に苦しむ人が多いと信じられている。

夏休みに帰国した際、福島県いわき市内の常磐病院を訪問した。被災地の病院を自分の目で見てみたかったからだ。到着すると、まず事務職員の方から、震災後に加速した医師・看護師不足の現状について説明を受けた。この問題に対し、病院側は勤務者たちと向き合い、細やかな配慮をしていた。

病院内には保育施設があり、幼児を二十四時間体制で預かっていた。敷地内に設置された児童クラブでは、帰宅が遅くなる職員の子どもを預かり、勉強や遊ぶ場を提供していた。さらに院内には、看護師が産休など長期ブランクから職場復帰ができるよう、復職支援センターが設置されていた。

取り組みを始めてから六年、常勤医も看護師も増えた。福島県内の他に、東京、鹿児島、広島、徳島から、医師や看護師が集まっていた。

案内をしてくださった事務職員の方は、大学を卒業後、自らこの病院勤務を志望したそうだ。彼は「病院の熱気に引き寄せられた」と言った。活気あふれる病院を見学し、私もいつかこの地で働きたいと思った。

現在、世界各国で都心に若者が集中することによる、医療従事者の地域偏在が深刻になっている。スロバキアも例外ではない。若い医師がチェコやオーストリアへ転出し、問題になっている。常磐病院の試みは、世界中の地方病院で参考になると思う。スロバキアに戻ったら周囲に広めようと思う。